いただきます（竜野保育園）

うたごよみ　～長月～

渡辺幸士 選

［短歌］

盆夕べ墓苑に来て鳴く鶯の声澄み渡り亡夫を思えり　本田冨美子

魁皇の史上最多の白星は一〇四七勝力士の鏡　松本ぬい子

季を得て変わらぬ朝の蝉時雨騒々しくて今日も炎暑か　森田　房恵

寂しさを包むごとくに花咲かす亡き友植えし芙蓉の花は　内田乃武子

庭の槇青く萌ゆれば輝きに浸るひと時われの朝かな　井上ユリ子

高々と打ち上げられし大花火夜空に爆ぜて下界を曝す　上村　かず

節電に緑のカーテンよしずかけ昔の知恵を思い出しおり　吉永由紀子

盆迎え六個の遺影拭きながら話かければ笑顔に見ゆる　上村やす美

子雀を捕らえて子猫はしゃぎいる此の世に生まれし定めなれども　内山タミエ

あっぱれな「なでしこジャパン」の乙女たち多大な勇気皆に与ゆる　緒方　明美

真夜中の蒼白く照る満月をかざす指先やさしく見ゆる　赤星　延子

アナログが明日で終わるという夜は古いテレビに別れを惜しむ　塚原　暁益

五十余年経て訪ねたる初任地の老いの記憶に吾があだ名あり　渡辺　幸士

［川柳］

渡辺幸士 選

［夕立］

夕立が布団濡らして逃げて行く　北　仁子

夕立でお御堂さんに雨宿り　早　彦喜

夕立の光る稲妻身も縮み　道上キヌ子

節電で待っていました夕立を　古閑チヨミ

野良仕事夕立でもと水不足　緒方　瑞枝

［汗］

応援と汗と涙の甲子園　伊豆野ヤエ

汗かいた後で西瓜にかぶりつく　布田　愛子

誰よりも多く流した亡父の汗　丸岡はる子

心地良い汗を流してボランティア　林　雅之

働いた汗が男の顔にする　渡辺　幸士

［俳句］

もぎたての光るトマトを隣より　本田　信子

冷や奴茗荷きざんで客を待つ　古田　幸子

夏雲や川の長堤闊歩する　高田レイ子

蚊を叩く掌の音空振りに　堀田　孝恵

机（き）に凭（もた）れ暮春の心通わする　楠本　美鶴

くちなしの香メロディのごと流れくる　田端　慶子

■お問い合わせ先　町教育委員会公民館事務局
TEL 096-234-1111（内線321）

ひとの動き（敬称略）
7月11日(月)～8月10日(水)

birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
下横田	坂井 蒼空（そら）	男	理 恵
府 領	上村 兼聖（けんせい）	男	一 誠
芝 原	芹口 叶（かない）	男	俊 浩
下横田	農上 結愛（ゆあ）	女	佳 樹
緑 町	木原 羽夢（うむ）	女	元 春
有 安	西村 遼太郎（りょうたろう）	男	哲 一
東寒野	山下 宇宙（そら）	男	廣 幸

marriage ご結婚おめでとう

	住所	氏名
夫	豊 内	本田 俊夫
妻	豊 内	出水 愛
夫	白 旗	本田 文秋
妻	熊本市	前田 櫻子
夫	熊本市	宮川 義徳
妻	糸 田	藤井 綾子

condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
緑 町	渡辺健一郎	68	禎 子
津志田	清永アキエ	92	アキエ
糸 田	緒方 孝子	71	誠 也
仁田子	一村フミエ	88	一 志
坂 谷	山村 ツル	95	達 八
坂 谷	後藤 初喜	84	孝 信
横 田	佐川富美子	90	友 和
船 津	北野 廣子	69	廣 子
麻生原	西永タカコ	94	利 勝
白 旗	渡邉 好女	88	勝 美
船 津	松本 健次	74	文 雄
仁田子	吉居 義雄	75	エミ子

Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,407	1
女	6,081	△5
計	11,488	△4
世帯数	4,194	4

平成23年7月31日現在

〔町史編さんだより〕

甲佐の歴史を紡いで
～町史編さんだより(35)～

緑川と釈迦院川の合流点は?

町史編集委員 鈴木 康夫（自然）

私の専門は地理学で、研究の手段や方法として地図やなどの判読をします。新『甲佐町史』では、緑川編の緑川絵図に挑戦しています。

加藤清正によるとされる緑川改修は、実際は彼の死後、長い年月を経て完成しています。江戸時代に作成された絵図は、清正が設計図を描いた完成型の図化とみてよいでしょう。清正の改修の目的は、①緑川の洪水対策、②河道一本化による周辺農村での耕地開発、③緑川水運の航路確保などが挙げられます。上豊内付近で平野部に出た緑川は洪水の度に荒れ、氾らんや流路の変化を繰り返してきました。

絵図にみられるように、河道一本化以前は、甲佐平野の中で本流と枝流に分かれていた可能性があります。釈迦院川も支流ですが、一本化以前は、現在の合流点である中甲橋付近から安津橋付近までの間で合流していたと考えています。通説では平野内で合流せず、現在の御船川との合流点付近で合流していたとされますから、さきの考えは通説を否定することになります。

現在の緑川と釈迦院川との合流点

その根拠は3つあります。1つは、甲佐平野の堆積物のほとんどは緑川が運んでくる砂礫(れき)であり、小河川である釈迦院川が合流せず平野内の遠方まで堆積させることは考えにくいこと。2つには、洪水時の緑川は上豊内からまっすぐ西に向かい、さきの区間で2川は合流してしまうと考えられること。3つには、白旗と田口の間では幅500㍍の狭窄(きょうさく)部になり、2つの河川が独立して流れを保つことは自然の状態ではありえないこと。国土地理院の治水地形分類図でも、この区域はすべて河道として提示しています。

もし、清正の改修以前に、2川が合流せずに平野を流れていたとしたら、それ以前のこの地の支配者による人工的な2川分離と考えてよいかもしれません。また通説の「甲佐に二流あり」は本流と枝流の2流を指し、西側を流れる本流を、口頭による伝承で釈迦院川とした可能性も否定できません。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先
町社会教育課町史編纂係
☎096-234-3310

編集後記

四季の移り変わりは、その始まりを意識するもの。しかし、夏だけは、「夏の終わり」と表現するように、名残を惜しむ雰囲気を唯一連れている季節。

東日本大震災後、初めて迎えた今年の夏。電力不足問題から派生した社会の大変革によって、気温が上がるごとにパラダイムシフトを迫る猛暑に見舞われて、仕事も生活も劇的な変化に包まれた毎日。一つの時代が終わり、次の時代が始まった厳しい夏は、名残を惜しむ間もなく移ろいて、次代への視野の広い展望を最初の実りとしたい秋は、目の前。

本町でも今年の夏は、次代を視野に入れた取り組みについて改めて整理整頓されて、駆け上がるべき次のステージが開幕。

日に日に高くなる空を見上げつつ、その先を見通す新たな視点を磨いて迎えたい、実り豊かな季節の訪れ。（と）